

「現地化」の多元性

——マレーシア・サラワク州における
華人のファミリー・ヒストリーを事例として——

市 川 哲*

Multiplicity of Chinese Localization: A Case Study of a Chinese Family History in Sarawak, Malaysia

ICHIKAWA Tetsu*

The localization of Malaysian Chinese is often analyzed in relation to their orientation toward China from Malaysia. Their Malaysian-oriented identities are usually thought to parallel the transformation of their social status within Malaysia as a nation state. However the Malaysian Chinese localization is not limited to a uni-directional process. The individuals and families would have multiple orientations and we should not overlook the diversity among Malaysian Chinese and its significance for multiple localization. The ethnicity of Malaysian Chinese appears to be somewhere between unity and diversity. To discuss the multi-lineal localization process of the Malaysian Chinese, this paper takes one extended Chinese family in Sarawak as a case study. By reviewing the family history, the multi-directional localization process is examined. The first generation in this family came from Canton, China to Sarawak in early 20th century. The second and third generations born in Sarawak have interacted with other ethnic groups in Malaysia. The types of education which the local-born generations had also have significant influence on their ethnicity. By examining these facts, this paper analyzes the multi-lineal localization process among Malaysian Chinese.

キーワード：マレーシア，サラワク州，華人，エスニシティ，現地化，ファミリー・ヒストリー

Keywords: Malaysia, Sarawak, Chinese, Ethnicity, Localization, Family History

I 問題の所在——マレーシア華人の現地化とエスニシティ

マレーシアに限らず，海外に居住する広義の中国人のアイデンティティの変容を表す言葉として，「落葉帰根」と「落地生根」の二つがある。「落葉帰根」とは，落ちた葉がいずれは木の根元に帰って行くように，国外へ出稼ぎに出た中国人は，移住先で

* 立教大学観光学部プログラム・コーディネーター；College of Tourism, Rikkyo University, 1-6-11-402, Saiwai-cho, Shiki, Saitama, 353-0005/ tetsu-i@kb3.so-net.ne.jp

働き財を成した後にはいずれは帰国して故郷に錦を飾ることを意味する。この表現は、比較的初期の中国人移民の生活様式を表すために使用されることが多い。これに対し、「落地生根」とは、元々住んでいたところから離れた土地に根を下ろして生活することを意味し、中国系移民やその子孫が、中国に帰って生活する意思を持たずに居住地で生活し続ける状態を指す。この表現は、主に現地生まれの華人の現地化の過程を現すために用いられる。そのため一般的には「落葉帰根」とは、いずれは中国に帰国することを前提として海外で生活を送る、一時滞在者的なライフスタイルやメンタリティを表現するための言葉であり、これに対し「落地生根」は、もはや中国への帰国を念頭に置かず、居住国家の国民として定着してゆく者のそれを表す言葉であるとされる。

この「落葉帰根」と「落地生根」という言葉は、中国系移民を指す呼称法とも密接に関係している。海外に居住する中国系移民を指す代表的な言葉として「華僑」と「華人」がある。これら二つの語はそれぞれ中国国籍を持つ在外中国人としての「華僑」と、居住国の国籍を取得し現地化の過程にある「華人」といったかたちで大まかに区別され使用されているが、前述の「落葉帰根」と「落地生根」はこうした「華僑」と「華人」のライフスタイルやメンタリティを表す際にも用いられる。一時滞在者的な「華僑」から現地化した定住者としての「華人」へ、という変化の過程は、「落葉帰根」から「落地生根」へという枠組みと対応させる形で説明される傾向がある[e.g. 戴 1980; Suryadinata 1997; Wang 1998; Tan 1998]。

東南アジアの華人社会、特にマレーシアやシンガポールでは、「華僑」と「華人」との区別は、研究者によって意識化される以前に、当事者である中国系住民自身によって無視できない問題とされてきた。マレーシアが国家として独立する以前には、マレーシアの中国系住民は中国出身か現地生まれかを問わず、自称として「華僑」の語を用いることが一般的であった。しかし国家としてのマレーシアが成立する過程で、すでに中国に帰国する意思がなく、マレーシアの国民として生活することを選択した中国系住民にとっては、自称の中に一時滞在者を意味する「僑」という語を用いることは、多数派を占めるマレー人を始めとする他の民族集団からマレーシアに対するナショナル・アイデンティティを疑われる恐れがあるという欠点があった。当事者である中国系住民自身により、より中立的な意味合いの「華人」という語が使用されるようになったのにはこのような背景がある[Tan 2000: 37-38]。

ただし、こうした「華僑」と「華人」の区別に見られる、中国志向から現地志向へ、という変化に注目する枠組みには、マレーシアにおける華人の生活世界の多様性を把握する場合には検討の余地がある。特に個別の居住地におけるミクロ・レベルでの華人のエスニック・アイデンティティを分析する際には、「華僑」から「華人」へ、あるいは「落葉帰根」から「落地生根」へ、という単線的な変化に注目するだけの枠組みは単純にすぎる。中国人とは異なる現地化した「華人」というカテゴリーの中に、すべてのマレーシア華人を一様に包摂する観点を採るのは、多くの場合、困難を伴うからである。

この問題について考察するために、本稿は特に以下の二点に注目する。第一点目は、マレーシア華人にとって、ナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンテ

ィティの双方がどのような意味を持つのかという問題である。第二点目は、「マレーシア華人」というエスニック・グループ内部の多様性に関する問題である。

第一点目は、それぞれの華人が、居住国であるマレーシアに対するナショナル・アイデンティティと、中国に出自を持つ者としてのエスニック・アイデンティティの二つを、どのように両立させるのかという問題である。自己の居住国であるマレーシアに対するナショナル・アイデンティティと、中国大陸に出自を持つという文化的・民族的なアイデンティティは、必ずしも一致するわけではない。またマレーシアにおけるエスニック・マイノリティとしての立場は、マレー人をはじめとする非華人系住民との公的あるいは私的な相互交渉の過程で、不断に意味付けられることとなる。こうしたナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンティティをいかに調停させ、それぞれをどのように解釈するべきかは、マレーシア華人自身によってもしばしば議論の対象となってきた問題である[e.g. 原 2000; 何 2002]。

第二点目は、「マレーシア華人」というエスニック・グループ内部の多様性に関する問題である。特にマレーシア華人の祖先の中国における出身地の偏差には多くの先行研究が注目してきた。マレーシア華人というエスニック・グループの内部には、さらに広東系や福建系、客家系といった、ローカルなレベルで分節される下位集団が存在する。こうした華人社会内部のサブ・グループやサブ・エスニシティの存在は、華人のエスニシティの分節的な性格を現すものとして多くの研究者の注目を集めてきた[e.g. Crissman 1967; Strauch 1981; Guldin 1997; Tan 2000]¹⁾。特にマレーシア華人を対象とした先行研究では、同郷会館をはじめとする華人の地縁組織やその活動に注目するものが多く存在するが、こうした研究は華人社会内部の地縁に基づく下位集団に注目するものである。このような研究はマレーシア華人のエスニシティを均質的なものとして捉えるのではなく、内部のバリエーションを重視する傾向を持つといえる[e.g. 李 1965; 今堀 1973; Moese 1979; 谷口 1987; 劉 1998]。

第一の問題点がナショナルなレベルにおけるマレーシア華人のエスニシティの統一性に注目するものであるとすれば、第二の問題点は、ローカルなレベルでの重層性に注目するものである。現実には、マレーシア華人のエスニシティはそれぞれの華人が置かれる状況に従い、こうした統一性と重層性との間で決定されることになる。そのため、前述した華人社会のアイデンティティの変容を表す「落葉帰根」から「落地生根」へという枠組みも、現在のマレーシアにおける華人のエスニシティを捉えるためには一面的なものであるといえる。マレーシア華人のエスニシティの具体的な様相を把握するためには、マレーシアという国家の中で定住化し世代を重ねながらも、華人社会内部に存在する下位集団の存在や、世代ごとのアイデンティティの偏差などの様々な要因を視野に入れる必要がある。

以上の問題について考察するために、本稿はサラワク州に居住する華人に注目し、そのエスニックな特徴や自己認識の変化を、「現地化」という観点から分析することとする。本稿が使用する「現地化」という概念は、現地の華人自身によって使用される

1) このような華人社会のサブ・エスニシティを対象とした先行研究の問題点については、別稿で論じたことがある[市川 2007]。

民俗用語ではない。現地の華人からは、「同化」や「本地化」、「本土化」といった表現が使用される。これらの言葉は現住地であるマレーシアで生まれ育ったことにより獲得したローカルな特徴について言及する際に用いられる傾向がある。そのため、サラワク華人にとっての現地化も、現地で世代を下るに従い、中国志向からマレーシア志向へ、あるいは、華僑から華人へ、という社会的立場やアイデンティティの変化と平行している部分がある。

だが前述したように、マレーシア華人のエスニシティの現地化を、マレーシアという国家への一方向的な同一化として捉える姿勢は、華人のエスニシティを過度に均質化して捉えてしまい、ミクロなレベルで存在する、エスニシティの統一性と重層性の相互関係を軽視してしまう恐れがある。そのため本稿では、当事者たちが用いる「同化」や「本地化」、「本土化」といった民俗用語ではなく、居住地での生活経験によって得られた生活様式や自己認識の変容を指すために、「現地化」という語を用いることとする。そしてこのような観点から、本稿では華人の「現地化」を、必ずしもマレーシア国民として一様に統合されて行く過程としてはみなさず、むしろ個々の華人の個別の居住地域の具体的な生活経験に注目し、ミクロなレベルでの「現地化」の過程を跡付ける作業を行う。それにより、前述したマレーシア華人のエスニシティの重層性を把握することを試みる。そのために本稿では、サラワクに居住するある華人の家族を事例に採る。そして複数の世代のライフ・ヒストリーを分析することにより、上述した問題について考察することとする。

II サラワクにおける華人の地域性と現地化

サラワクにおける華人社会を対象とした研究は、サラワクがマレーシアに統合される以前から行われてきた。サラワク華人社会に対する先駆的な調査を行ったティエンは、第二次世界大戦終了後の1940年代後半にクチン周辺で人類学的な調査を行い²⁾、主にサラワク華人の同姓団体や、その経済活動に注目した研究を行った[T'ien 1997(1953)]。これ以降、サラワク華人社会を対象とした研究がマレーシア内外の研究者によってなされることとなった。

サラワク華人社会を対象とした歴史的な研究の多くは、1841年よりサラワク王国を統治したブルック家の下で、華人がいかにして当該地域に流入しコミュニティを形成したのかを主要な研究テーマとするものが多い³⁾。これらの研究は、中国系移民たち

2) ティエンの調査はイギリス植民地政府によるサラワク住民を対象とした研究プロジェクトの一環としてなされ、エドモンド・リーチをはじめとする人類学者が中心となって実行した。ティエンがサラワクの華人社会を調査したのと同じ時期に、イバンや、ビダユ、ムラナウといった他の民族集団を対象とした人類学的調査も行われた。

3) 現在のサラワク州は、1841年にイギリス人ジェームズ・ブルックが現在のクチン周辺の地域をブルネイのスルタンから獲得して成立させたサラワク王国に端を発する。第二次世界大戦の勃発により、サラワク王国は1941年から日本軍政下に置かれた。戦後の1946年、三代目国王ヴァイナー・ブルックは王位を退き、サラワクはイギリスの統治下に入った。さらに1963年にはサラワクはサバ、シンガポールとともにマレーシア連邦の一部となり、イギリスから独立することとなった。

が、統治者であるサラワク政府やマレーやイバンやビダユ、オラン・ウルといった先住民とどのような社会的関係を取り結び、定着的なコミュニティを設立してきたのかといった問題を取り扱う傾向がある〔Chin 1981; Chew 1990; Lockerd 2003〕。サラワクへの華人の移住は、他地域の華人社会と同様、出身地における地縁集団や方言集団のネットワークに依拠することが多かった。そのため、移住と定住に伴う華人の地縁集団や方言集団ごとの居住パターンに注目した、地理学的な研究もなされてきた〔Kiu 1997; 山下 2002〕。こうした研究と同時に、サラワク華人の経済活動や宗教活動を中心とする、他のエスニック・グループとの相互関係に注目した人類学的な調査も行われた〔Fidler 1976, 1978; 吉原 1982〕。また、サラワクにおける華人と他の民族集団との相互関係は、日常的な社会関係や経済関係だけに限られるわけではなく、各民族集団の利害関係に依拠した政治的な活動も存在する。特に華語は華人のエスニック・アイデンティティの維持のために重要な役割を果たすため、サラワクにおける華人の政治活動の中でも主要な論点となってきた。このような背景から、サラワクにおける華人を主要な支持基盤とした政党の活動に注目した研究〔Chin 1997〕や、華人がサラワクにおける華語教育を如何にして維持してきたかという問題に注目した研究〔小木 1994; 田村 2004〕もなされてきた。いずれの研究も、サラワクの多民族状況が華人の政党政治や教育活動にどのような影響を与えてきたのかを重視するという特徴を持つ。また近年ではマレーシア華人の研究者、特にサラワクに居住する華人自身による、現地の華人社会の文化や歴史が研究されるようになってきている。こうした現地の華人研究者によってなされる研究では、サラワク各地の個別地域におけるミクロなレベルでの華人社会の形成史〔劉 1998, 2000, 2001; 蔡 2004; 呉 2004〕や、同郷会館や宗親会の組織形態やその活動内容に関する研究〔田 1991, 1999〕、サラワクの都市とその周辺部における華人の経済活動に注目した研究〔蔡 2001〕等がなされている⁴⁾。

サラワク華人社会を対象とした先行研究の中でも、特に歴史学のおよび人類学的な研究は、半島部マレーシアとは異なる歴史的な背景や、域内に数多くの少数民族が居住するという状況が、当該地域の華人社会にいかなる影響を与えてきたのかを重視してきた⁵⁾。いわば、マレーシアという国家の中では周辺の位置にあるサラワク州の華人の地域性を、その多民族状況に注目することにより明らかにする傾向があったといえよう。

ただし、こうしたサラワクの多民族状況に注目した研究が数多く存在する一方で、半島部マレーシアの華人社会と比較した場合のサラワク華人社会の地域的特徴を明ら

4) 現地の研究者の研究活動はサラワクのみならずマレーシア各地で行われるが、近年は特にシブに拠点を置く砂拉越華族文化協会が重要な役割を果たしている。

5) サラワクの華人社会自体を対象とした研究以外に、サラワク先住民を対象とした研究でも、先住民が華人とどのような接触の過程をおかれてきたのかがしばしば言及されてきた。特にブルック家による統治が開始した 19 世紀中頃から現在に至るまで、サラワクの先住民が華人との経済活動を通じて外部社会とどのような関係を取り結んでいるのかといった問題や〔Sutlive 1989; King 1993; Ooi 1997〕、華人と先住民との婚姻や〔Winzeler 1997: 220〕、先住民が華人を始めとする他の民族集団をどのように認識しているのか〔Rousseau 1990: 58〕といった社会的な関係が注目される傾向がある。

かにする研究は盛んになされているとはいえない状態である。前述のように、マレーシア華人は均質的な性格を持つ成員によって構成される民族集団ではなく、その内部に様々な下位集団を内包する民族的なカテゴリーである。従来、マレーシア華人社会内部の多様性に関しては中国における出身地ごとの地縁関係や使用言語の違いといった部分から説明されることが多かった。だが現在のマレーシア華人のエスニシティの多様性を理解するためには、中国における出身地や使用言語といった問題だけでなく、マレーシア国内における地域的な偏差も視野に入れる必要がある。このような作業は華人のエスニシティを地域的な多様性の中で理解するために重要な意味を持つと思われる。

またサラワク華人社会を対象とした先行研究は、華人社会の歴史的背景を重視する傾向があるが、その多くは特定の華人コミュニティを分析の対象として選択する傾向があった。そのため個々の華人のサラワクにおける移住や定住に関する経験や、中国生まれや現地生まれの華人といった、それぞれの世代間に見られる生活様式やアイデンティティの差異といった問題をミクロなレベルから明らかにする作業はそれほど重視されてこなかった⁶⁾。サラワクにおける華人の移住や定住を、個人的な経験というレベルから捉えることは、研究者が断片的に言及するレベルにとどまり [e.g. Chew 1990: 82-85; Lockard 2003: 34-35]、それ自体が調査研究の主題として扱われることは少なかったのである。さらに、マレーシアにおける華人としてのエスニックな特徴や自己認識は常に変化しており、必ずしも各世代で共通しているとは限らない。華人社会の地域的な多様性を明らかにするためには、マレーシアという国家の中における華人の位置付けという、マクロ・レベルでの考察とともに、ミクロ・レベルでの個別の居住地における華人の生活経験に注目する視点も必要とされるであろう。

以上の問題意識から、本稿はサラワク州のある華人家族の三世代にわたるファミリー・ヒストリーを事例として選択する。その際に、特にそれぞれの世代の生活経験に注目し、それがそれぞれの世代でどのような偏差があるのかを検討することとする。ここで特定の家族内部の複数の世代を取り上げる理由は、それぞれの世代の個人の生活経験を比較することにより、マレーシア、およびサラワクにおける華人の現地化を、通時的に検討することを目的としているからである。そして中国からサラワクへの移住、サラワク域内での移動、さらにマレーシア国民としての定住化の中で、いかなる現地化の過程に置かれているのかの一端を明らかにする。本稿で取り上げる黄家⁷⁾は州都クチンの郊外に居住する華人の家族である。だが後述するように、この家族のメンバーはサラワクのみならずマレーシアやシンガポール、台湾、イギリスにまで分散して居住しており、また福建系華人の言語や生活様式を身に付けた広東系華人という

6) 近年、半島部マレーシアやシンガポールの華人のライフ・ヒストリーや個人の語りを積極的に採り上げる研究がなされるようになってきた[e.g. Chan & Chiang 1994; 邱 2004]。こうした研究は個々の華人を対象とした聞き取り調査に基づくことにより、華人の具体的な生活経験を明らかにしている。しかし、本稿が行うような、同一の家族の複数の世代にわたる生活様式やアイデンティティの変化といった問題に注目した研究はいまだ数少ないように見受けられる。

7) 事例として採り上げるファミリー・ヒストリーは、主に2003年1～3月、2004年8～9月、2005年2～3月、2007年8月～9月に行った調査に依拠している。なお、文中の人名は全て仮名である。

部分で、本稿が問題とするサラワクにおける華人の現地化の多元性を考察する上での好例であると思われる。もとより一家族のみの事例からサラワク華人社会の地域性を理解することには限界があるが、本稿は複数の世代の生活経験を追うことにより、華人のエスニシティの地域的な多様性と世代ごとの現地化の多元性を分析する方法の方向性と可能性について検討することを試みる⁸⁾。

III 黄家のファミリー・ヒストリー

1 中国からサラワクへ

本稿が採り上げる華人の家族成員の大多数は現在、サラワク州の各地に居住している。サラワクにおけるこの家族の第一世代は、20世紀初頭に中国からサラワクに到来した。そのため本稿では、この家族の第一世代のライフ・ヒストリーから検討することとする。サラワクにおける第一世代である男性の黄仁培は1918年に中国広東省新会県で生まれた。仁培の父親には二人の配偶者がいた。一番目の配偶者が死亡し、次に娶った女性が仁培の母親であった。仁培は1931年、13歳の時に「南洋」に來た⁹⁾。仁培の父親は国民党員であった。黄一家が住んでいた地域では国民党と共産党との間の闘争が激化していた。また中国における黄一家の生活も苦しく、海外に活路を求めることとなった。当時、イギリスやオランダ等の西洋諸国によって植民地統治されていた東南アジア諸地域で使用されていた通貨の価値が比較的安定しており、またそれらの地域は治安も良いと考えられていたからである。黄家では父親と仁培、その兄が「南洋」に行くことになった。仁培の母親は中国に残った。

仁培は先ず中国からシンガポールに渡り、その後、当時ブルック家によって統治されていたサラワクに到来した。その当時、仁培の父親と兄はすでにボルネオに到来していた。仁培は五人兄弟であった。一番上の兄は父親の最初の配偶者の子供であり、彼がすでにボルネオで生活していた。仁培の異母兄は最初、新会県と同郷者を頼り、サラワクの都市ビンタンゴール（Bintangor）に到達した。異母兄は、特に初めからサラワクを目的地としていたのではなく、他の新会県と同郷者に連れられて渡航しただけのようであった。1930年代当時、ビンタンゴールには新会県出身者たちが入植し

8) 本稿が扱うファミリー・ヒストリーは、一定の期間になされたインタビュー調査をそのまま記述したものではなく、各家族成員とのフォーマル、インフォーマルを含めた会話やインタビューの中で得られた情報を筆者が再構築し、それを時系列的にまとめたものである。そのため本稿で記述された内容は、単なる当事者の語りの再現ではなく、筆者と調査協力者との相互交渉を筆者が記述しなおしたという性格を持っていることをあらかじめ明記しておきたい。なお、すでに死亡した第一世代の男性のライフ・ヒストリーに関しては、主にその子供である第二世代の年長者、特に長男と三女、四女からの説明に依拠している。また第二世代および第三世代のライフ・ヒストリーに関しては、それぞれの当事者との会話から得られた情報に基づいている。そのためファミリー・ヒストリーの中でも第一世代に関する記述は間接的な情報に基づいており、第二世代以降に関する記述はより直接的な情報に基づいている。

9) 「南洋」は現代中国語では東南アジア諸地域を指し、マレーシア華人が使用する華語でもほぼ同じ意味で用いられる。この家族も、第一世代の最初の渡航先を、現在の国家としてのマレーシアを明確に意識しているわけではなく、「南洋」という比較的広範囲にわたる地域として捉えているため、本稿でもこうした表現に従った。

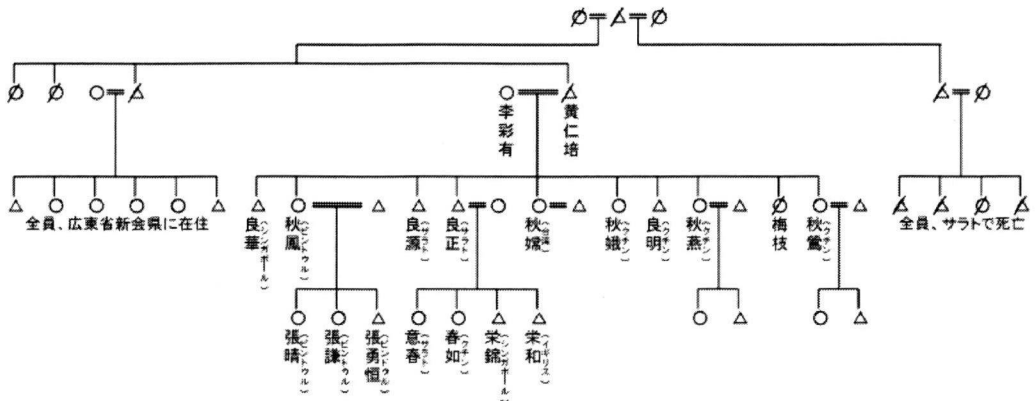


図1 黄家の家族関係図

てコミュニティを形成しており、そうした者たちが仁培やその兄といった中国の関係を呼び寄せたのである。

仁培の父親はサラワクには短期間居住しただけであり、仁培がビンタンゴールに来ると、数年後に中国に帰国してしまった。彼の妻（仁培の母親）やその他の子供たちが中国で生活していたためである。仁培の父親はその後サラワクに来ることはなく、1949年に中国で死亡した。父親の帰国後も、仁培と兄はビンタンゴールで数年間、農業を行った。兄は仁培がサラワクに到達するよりも10年ほど前からサラワクで生活していたとのことであった。彼らはビンタンゴールで他の華人とともに、コショウの栽培を行ったり、野生のサゴヤシからデンプンを精製し販売したりしていた¹⁰⁾。

仁培が18歳になると、彼と兄はラジャン川（Batang Rejang）流域の主要都市であるシブ（Sibu）に住居を移した。そこで彼らは華人の仕立屋で働き始めた。シブは主に福州人によって開墾された都市であり、シブの華人の多数派も福州人であったが、市街地には広東人や福建人が居住し、経済活動に従事していた¹¹⁾。そのため仁培たちは同じ広東系華人の仕立屋で働くことが出来た。仁培も兄も仕立ての仕事を覚えたが、シブではなかなか自分の店を持つことが出来なかった。

1941年に日本軍が東南アジアへの侵攻を始めると、仁培と兄は日本軍を避けるために、ラジャン川から離れた小さな都市であるサラト（Saratok）へと住居を移すことにした。サラトにもすでに新会県出身者が居住していたため、この時も同郷者を頼って住居を移したとのことである。ただしビンタンゴールとは異なり、サラトに居住する華人のマジョリティは福建人であった。そのためサラトに居住する華人たちの共通

10) サラワクにおける初期の華人社会では、それぞれの地縁集団ごとに従事する者が多い職業が存在した。広東系華人は客家系華人とともに、コショウ栽培を中心とする農業に従事する者が多かったとされる[e.g. Lockard 2003: 25-26]。

11) シブは20世紀初頭に福建省福州地方出身の黄乃裳が、当時サラワクを統治していたチャールズ・ブルックから許可を得て、同郷の福州人を呼び寄せることによって開墾した都市である[劉 1998]。そのためシブでは他のマレーシアの諸都市とは異なり、現在でも当該地域の華人コミュニティでの主要な共通語として福州語が用いられている。

語も福建語であった。仁培も兄も、中国に居住していた時にもピンタンゴールに居住していた時にも、広東語を使用して生活していた。そのため、サラトに住居を移した時には彼らは福建語を話すことができず、他の福建系住民との意思疎通は必ずしも容易ではなかったとのことである。仁培の兄は 1943 年にサラトで病死し、当地の華人墓地に埋葬された。

仁培は日本軍政期の 1945 年にサラトで結婚した。配偶者の李彩有も彼と同様、広東人である。彼女は 1925 年に広東省新会県で生まれ、1929 年に両親やキョウダイとともにサラワクに移住して来た。彼女の両親はサラワク州のラジャン川沿岸の都市であるサリケイ (Sarikei) に居住し、コショウの栽培を行っていた。サリケイは広東省出身者が多く住む地であり、当時のサリケイの華人社会の共通語も広東語であった¹²⁾。結婚時、仁培は 27 歳であり、彩有は 20 歳であった。両者とも結婚してすぐは福建語を話すことが出来ず、お互いに広東語で会話をしていたとのことである。結婚後も仁培はサラトに住み続けた。当時、サラトと他の都市とを結ぶ道路はなく、交通は主にサラトに接して流れるクリエン川 (Sungai Kerian) を行き来する船を利用していた。こうした船による移動は時間がかかるため、他の都市に行く途上でしばしばイバンのロングハウスに泊まる必要があった。

日本軍政期から戦後にかけて、仁培は主にサラト周辺に居住するイバンを相手とした商売を行っていた。イバンとの商売は主に物々交換であった。すでにブルック家の統治下で、サラワクのイバンは貨幣を使用してはいたが、戦中や戦後すぐのサラトの周辺に居住するイバンとの商売では、貨幣を用いることは少なかったとのことである。このような物々交換では、仁培は自宅で所有している物や町で手に入れた商品をサラト周辺のイバンのロングハウスに持って行き、イバンの提供する品々と交換し、それを自分たちで消費したり、町に持って帰って売却したりしていたとのことである。町からは衣服や靴、砂糖、塩、調理用油等を持って行き、ロングハウスではコメやゴム、ラタン等の森林産物を入手していた。こうしたことは 1950 年代まで行われていたとのことである¹³⁾。イバンとの物々交換は、仁培に限らず、当時サラトに居住していた多くの華人が行っていた。仁培はこうした物々交換や日常生活を送る上での必要にかられ、イバン語やマレー語を徐々に覚えて行ったとのことである。また前述のようにサラトの華人コミュニティの共通語は福建語であったため、仁培と彩有は福建語も身につけていった。

12) ただし現在のサリケイには、同じくラジャン川沿岸の都市であるシブから福州系の華人が移住してきている。現在、福州系華人の多くはサリケイ市街地中心部に居住して主に商業活動を行い、広東系華人はサリケイ市街地周辺で農業に従事する傾向が見られる。そのため現在のサリケイの華人社会では、広東語に加え、福州語も華人社会内部の共通語として広く使用されている。

13) イバンを始めとするサラワクの先住民と華人との物々交換に基づく経済関係は、仁培が活動を開始した 1940 年代以前からすでにサラワク各地で存在していた。ラジャン川やルパール川 (Batang Lupar)、バラム川 (Batang Baram) といったサラワクの主な河川の流域では、19 世紀末から、すでに市場 (pasar) に居住する華人と、遠隔地 (ulu) に居住するイバンを始めとする先住民との間で交易がなされていた [Chew 1990: 63-77]。

2 サラワクでの定住

サラトで結婚して家族をもうけ、生活して行く過程で、仁培と彩有は次第にサラワクに定着していった。また戦後、日本軍政から解放されたサラワクは、ブルック家の統治からイギリスの統治をへて、マレーシアの一部として統合されることになった。サラワクにおける黄家のメンバーも、こうした政治的な流れの中で、サラワクにおける生活だけでなく、マレーシアという国家の国民として生活することになったのである。

仁培と彩有は10人の子供をもうけた（うち一人は幼少時に死亡）。現在、子供たちのうち7人がサラワクに居住し、一人は台湾、もう一人はシンガポールに居住している。これらの子供たちは皆サラトで生まれ育った。

仁培は戦後しばらくしてイバンとの物々交換を続ける一方で、サラトの市街地で仕立屋をはじめた。だがその商売はなかなか軌道に乗らなかったとのことである。そのため1955年からはサラト郊外のディソ（Diso）という土地で約40エーカーのゴム園を経営することにした。仁培と彩有はサラト市街に居住しているときに秋鶯（女、1947年生）、梅枝（女、1950年生、幼少時に死亡）、秋燕（女、1952年生）、良明（男、1953年生）、秋娥（女、1954年生）の5人の子供を得た。これらの子供たちは、サラト市街に居住する仁培の兄の妻の許で生活し、学校に通うことになった。仁培はディソで生活してゴム園の手入れや樹液のタッピングを行い、時々サラト市街に住む家族のところに帰るという生活を送っていた。さらに仁培がディソで働いている時に、秋嫦（女、1955年生）、良正（男、1957年生）、良源（男、1958年生）、秋鳳（女、1962年生）が生まれた。これらの子供は幼少期には仁培とともにディソで暮らし、学齢期になると年長のキョウダイたちと同様、サラト市街に居住する仁培の兄の妻の許で生活するようになった。

ゴム園の経営は比較的順調に行ったらしく、彼はまた市街地で仕立屋を行うのに十分な資金を得ることが可能になった。そのため1964年になると、仁培はディソからサラトの近くに帰り、仕立屋を再開した。ディソからサラトに戻ると、さらに一番下の子供である良華（男、1966年生）が生まれた。

ディソはイバンのロングハウスが多く存在する土地であり、仁培もディソで働いている時にはイバンと交流することが多く、ゴム園の労働者もイバンであった。そのためディソで働いている時期には、仁培はイバン語を使用することが多かった。仕立屋を再開してからは、彼の一家はサラトの街中の華人のショップハウスでは生活せず、市街地に隣接するムランゴ村（Kampung Melango）というマレー人のカンボン（村）の中にある家屋の中で生活するようになった。カンボンの中には華人は黄家以外にはもう一軒、別の家族がいるだけであり、住民は皆マレー人であった。その華人家族もサラトの華人の多数派である福建系であり、カンボンの中でサゴ・デンプンの精製を行っていた。これ以降、仁培の家族はマレー・カンボンの中で生活することとなった。仁培はムランゴ村で家族とともに生活し、毎日、市街地（*pasar*）にある仕立屋に行って仕事をしていた。

仁培と彩有の子供たちは皆、サラトにある銘新学校という華文学校に通った。銘新学校は第二次世界大戦以前からサラトにあった華文学校であり、教員はサラワク各地

出身の華人であった。学校では華語によって授業がなされていた。サラトの華人は日常的には福建語を使用して会話をしているが、銘新学校で勉強する生徒は華語を用いて会話することが求められていた。

長女の秋鶯と三女の秋燕は銘新学校を卒業し、1970年代にそれぞれ結婚してサラトを離れ、クチンで生活するようになった。秋鶯と秋燕はそれぞれ二人の子供を出産し、現在は配偶者とともにクチンで生活している。

長男の良明は1960年代にサラトで初等教育を終えるとシマンガン（Simanggang）¹⁴⁾の学校に進学した。当時、良明の通ったシマンガンの学校では英語を用いて授業がなされていた。教員はマレーシア人の他にも、オーストラリアやカナダ、アメリカ合衆国出身者もいたとのことである。良明は中等学校の五年生を終えると西マレーシアに行き、クアラルンプールにあるマレーシア工科大学（Universiti Teknologi Malaysia）に進学した。良明は3年間、そこで土木工学を学んだ。卒業後はサラワクに戻り、州政府の許でエンジニアとして働いた。その後奨学金を得てイギリスの大学に進学し、4年間勉強する機会を得た。イギリスでも土木工学の学位をとると、彼は再びサラワクに戻りエンジニアとして働くこととなった。さらに9年後、再び奨学金を得た彼はイギリスの大学院に進学し修士号を取得した。そしてまたサラワクに戻ると、州政府の下で土木建築に携わってきた。現在、良明は職場ではマレー語や英語を用いて仕事をし、家族とは福建語を用いて会話をしている。彼は政府の開発プロジェクトに従い、サラワク各地を転動しているが、定期的にクチンの家族のもとに戻る生活を送っている。また良明の生活で特徴的なのが、彼がエンジニアでありながら、華語を用いた文学活動を行っていることである。彼の華語教育はサラトの小学校で受けたもののみであるが、彼が執筆する作品は全て華語が用いられている。彼の執筆した小説は、馬來西亞福建社團聯合会という同郷団体により資金援助を受けて出版されている¹⁵⁾。

仁培がはじめたサラトの仕立屋は、次男の良正が引き継ぐこととなった。良正も、彼よりも年長の兄や姉と同様、銘新学校に通った。初等教育を終えると良正は仁培とともに仕立屋で働き始めた。仕立屋を始めてから現在に至るまで、彼らのほとんどの顧客はサラト市街およびその周辺地域に住むイバンである。そのため良正も仕事や日常生活の中でイバン語をマスターした。前述した秋鶯や秋燕、良明といった姉や兄が、サラトからクチンや西マレーシアに移り住んで行く一方で、良正はムランゴ村の家で、両親や弟や妹たちとともに住み続けた。良正は1970年代後半に結婚した。配偶者は彩有と同じくサリケイ出身の二世の広東系の華人女性であった。彼女はサリケイでは広東語を使用して日常生活を送っていたため、良正と結婚した時には福建語を話

14) 現在、シマンガンはスリ・アマン（Sri Aman）という名称になっている。1974年に北カリマンタン共産党のゲリラの一部がこの地で州政府と和平協定を結び、武装放棄に同意した。このことを記念し、シマンガンはマレー語で平和を意味するスリ・アマンという地名に変更された[砂拉越華族文化協会 1999: 2-3]。

15) マレーシア華人の同郷団体の主要な活動の一つが、華語によって執筆された文学作品の出版活動である。馬來西亞福建社團聯合会は、マレーシア各地に複数存在する福建系同郷会館の連合組織であり、華語による文学作品の出版や学術活動の援助を行っている[市川 2000]。

すことが出来なかった。そのため彼女は結婚してサラトに住むようになってからしばらくの間は、良正とは広東語ではなく、学校で学んだ華語を用いて会話をしていた。良正夫婦は1993年にサラト郊外に自宅を購入して引っ越すまで、30年近くムランゴ一村で生活した。

現在では良正夫婦はお互いに福建語を使用して会話をしているが、生まれ育った環境により、結婚してしばらくの間はそれぞれが日常的に使用する方言ではなく、学校で習い覚えた華語を使用して会話していたことは、サラワクにおける華人社会内部の多言語状況を顕著に表している。こうした家族内で使用する言語が異なる状況は、異なる世代の間にも存在する。第一世代の仁培と彩有は二人とも広東省出身ということもあり、お互いに日常的に広東語を使用して会話し、子供たちにも基本的に広東語で話しかけていた。しかし子供たち同士は、お互いに福建語で会話しており、両親にも福建語を用いて話しかけていた。サラトの華人社会のリンガ・フランカは福建語であるため、子供たちも日常生活の中で福建語を身につけていったのである。そのため仁培の子供の世代は、広東語を聞いて理解し話すことも可能であるが、日常的に使用する言語は福建語になっている¹⁶⁾。さらに後述するように、仁培の孫の世代になると、広東語は聞いて理解することは可能でも、自由に話すことは苦手になってきているとのことである。

上述のようにサラトの華人社会では福建語は重要な位置を占めているが、サラトの銘新学校では、良明や良正の世代の生徒は学校内で福建語を使用することを禁じられていた。彼らが銘新学校の生徒であった時期には、校内で福建語を話すと罰として教員により籐の棒で殴られたとのことである。こうした風習は良正の息子である栄和や栄錦が同じく銘新学校に通っていた時期にも行われていた。現在、銘新学校に在学中の良正の次女の世代では、こうしたことは行われてはいない。だがサラトにおける日常的生活では現在でも福建語が一般的に使用される一方で、学校の中では完全に華語を用いた授業がなされており、生徒同士も華語で会話することが求められている。

3 マレーシア国内および国外における活動

以上のように、黄一家はサラトで生活し、家族メンバーを増やししながら、サラワクで定着的な生活を送っていった。しかし時代を下るに従い、黄一家の生活空間は、サラワク内部のみに限定されず、マレーシア国内各地、さらにはマレーシア国外にも広がっていった。マレーシア国外での活動は、仁培の出身地である中国との関係のみに限られず、その他の国家にも広がっていったのである。そのため本節では、マレーシア国内および国外における黄家のメンバーの活動の拡大と、それに伴う生活経験の変化について見て行くこととする。

仁培と彩有の夫婦はムランゴ一村で暮らしながら仕立屋を続けていたが、1985年になると仁培は癌になり、サラトを離れクチンの病院に入院することになった。当時、

16) 黄家の第二世代の者はキョウダイ同士で会話をする際には、ほとんどの場合、福建語を使用するが、第三世代の者は、福建語に加え華語を用いることがある。華語の使用は若年者の間でより顕著に見られる。

長男である良明がクチンに家屋を購入したため、サラトで仕立屋を続けていた次男の良正とその家族、および三男の良源以外の未婚の子供たちはみなクチンの家屋に引っ越すこととなった。1980年代前半には、すでに六女の秋鳳と四男の良華が相次いでサラトを離れクチンに来て働き始めていたが、良明がクチンに家を購入し父母がそこで生活するようになると、彼女らも同じ家で一緒に生活するようになった。これにより、サラトの黄家のメンバーのほとんどがクチンで暮らすことになった。

仁培は1986年にクチンで死亡した。仁培は1931年から死亡するまでの間、一度も中国に戻る事がなく、新会県に住む家族に会うことも出来なかった。仁培の遺骨はサラトの華人墓地に埋葬され、位牌はサラトに居住する良正の家に置かれることになった。黄家のメンバーはサラトやクチンにある同姓団体である黄氏宗親会や、同郷会館である福建公会には参加していなかった。そのため、これらの宗親会や同郷会館から葬儀や埋葬の援助を受けることはなかった¹⁷⁾。現在でも黄家のメンバーの何人かは清明節にサラトの父親の墓を訪れる。だがこの時期に所用等で墓地を訪れることが出来ない場合には、現在もサラトに居住する良正の一家が代表して墓参を行うこととなる。清明節以外に家族成員が集まる特別な機会は春節である。ほとんどの場合、マレーシア国内外の黄家のメンバーは春節には帰省し一堂に会する。だが春節の際は、黄家のメンバーはかつて第一世代が住んでいたサラトに集まるのではなく、多くのメンバーが居住するクチンに集まっている。マレーシアの華人社会では、春節にはマレーシア各地に分散して居住している家族成員が出身地に戻ることが一般的である。だが春節の際にも出身地であるサラトに戻らない黄家のメンバーにとって、現在では大多数の家族成員が居住しているクチンの方がサラトよりも重要性を持っていることがうかがえる。

黄家のメンバーはその多くが現在でもサラワク州内各地に居住しているが、第二世代の中にはマレーシア国外に居住する者がいる。現在、五女の秋嫦は台湾で、四男の良華はシンガポールでそれぞれ居住している。また第三世代の榮和はイギリスに、榮錦はシンガポールにそれぞれ留学し生活している。

秋嫦は銘新学校を卒業し、そのままサラトの中等学校に進んだ。彼女が中等学校にいたときには、授業は英語で行われていた。教員は英国人やシンガポール人であった。中等学校の五年生を終えると、臨時採用の教員としてサラト周辺の小学校で2年間働いた。彼女が教えていた小学校は町から離れた場所にあり、ほとんどの生徒はロングハウスに住むイバンの子供であった。だが彼女はディソやサラトで生活している間にイバン語を覚えていたので、そうした地域で働くことに問題はなかったとのことである。

彼女はその後クチンに移ると、昼間は英国系の企業で働きながら、夜間学校で会計を学んだ。1994年に結婚するまで彼女はクチンの会社で会計の仕事続けた。彼女は

17) 宗親会は、姓を同じくする者同士が血縁を紐帯として設立する団体であり、公会や同郷会館は、出身地を同じくする者が地縁を紐帯として設立する団体である。葬送の援助や墓地の管理は、これらの血縁団体や地縁団体の主な活動の一つである。なおサラワクでは同郷会館は公会と呼ばれることが多い。

台湾からクチンに赴任していた台湾人の男性と結婚したため、結婚後は台湾の高雄で生活するようになった。高雄では華語（普通語）に加え、閩南語が使用されているが、彼女も幼少期から福建語¹⁸⁾を使用して生活し、華文学校でも教育を受けていたため、台湾での生活に支障はなかったとのことであった。

四男の良華は現在、シンガポールで働いている。良華は1980年代にサラトで教育を終えると、自動車の修理工場で働き始めた。さらに他の家族と共にクチンで生活するようになってからも、同じく自動車の修理工場で働いた。彼は1994年からシンガポールに行き、自動車整備工場で働くことにした。彼はシンガポールの華人はサラワクの華人よりも英語を使用言語とするものが多く、考え方も西洋化しているという印象を受けており、サラワクの華人よりも「洋化」していると述べる。良華は自分と共に働くシンガポール華人は、必ずしも華語教育を受けているとは限らず、英語教育を受けた者も多いと述べる。良華は小学校では華語教育を受け、中学校でははじめの数年は英語で授業を受けていたが、後にマレー語教育に切り替わった。そのため彼は、相互の教育言語の違いをサラワク華人とシンガポール華人の主な相違点として説明する。

サラワクにおける黄家の第三世代である、良正の子供の世代についても見てみたい。良正の子供の栄和、栄錦、春如、意春は皆、サラトで生まれた。年長の3人は黄家の第二世代の多くの者と同じく、ムランゴー村で生まれ育った。一番下の意春は1980年代に良正がサラト郊外に購入した家屋で一家が住んでいるときに生まれ、そこで育った。キョウダイの内、年長の栄和と栄錦は小学校では華語、中学校ではマレー語、クアラルンプールの大学では英語を使用した教育を受けた。そのため、2人とも進学したばかりの時にはそれぞれの言語に慣れるのに苦労したと述べていた。

栄錦は現在、シンガポールで生活している。彼はクアラルンプールの大学で土木工学を学び、卒業後は企業で数年間働いた後、さらにシンガポールの大学院に進学した。前述のように、第三世代である栄和と栄錦は福建語を日常的に話しており、広東語はそれほど得意ではない。だがクアラルンプールの華人社会の共通語の一つは広東語である。そのため、栄錦によると、彼がクアラルンプールの大学に在学していた際、華人の友人と話をする時には、なるべく広東語での会話を避けようとしていたとのことであった。サラトで福建語や華語を使用し、広東語を使用する機会が少なかった栄和や栄錦の世代は、広東系華人の子孫ではあるが、広東語が共通語であるクアラルンプールでは、他の華人との間でのコミュニケーションに支障が生じる場合があるのである。このように、祖父母が広東省出身の広東系華人という背景にもかかわらず、居住地における華人社会のマジョリティの使用言語からの影響を受け、必ずしも広東語が得意でない世代も誕生しているのである。

18) 台湾で話される閩南語はマレーシア華人社会の福建語とほぼ同じであるため、彼女によると相互の意思疎通にはほとんど問題はないとのことである。

IV 考察——現地化の諸相

黄家の三世代にわたるファミリー・ヒストリーを通して見ることににより、ここではサラワクに居住する華人の現地化がどのような特徴を持っているのかについて考察することとしたい。

1 使用言語

黄家のファミリー・ヒストリーを検討した際に、先ず注目すべきなのが、それぞれの世代や居住地にみられる使用言語の差異である。マレーシアにおける黄家の第一世代である仁培は広東省新会県出身であり、配偶者の彩有も広東省出身のため、二人は民系的には広東人であり、お互いの会話も広東語を使用していた。しかし、中国からサラワクに移住し、定住する中で、第一世代の広東人としてのエスニックな特性は第一世代の生活にさまざまな影響を与え、またその後の言語生活も変化してきている。

第一世代仁培と彩有は華語教育を受けているわけではなく、日常的に華語を使用することもなかった。その代わりに、仁培はシンガポール、ピンタンゴール、シブ、サラト、クチンといった都市を点々とするにより、各地域の華人社会で使用されている各方言や、マレー語やイバン語を習得して行った。マレー語やイバン語は前述したように、サラトでの商業活動を行う中で、主要な顧客であったこれらの人々との交流の中で習得する必要があったためである。

こうした他の民族集団の言語の習得以外にも、サラワク各地の華人社会で使用されている言語の偏差も、黄家のメンバーの使用言語に多大な影響を与えている。マレーシア華人社会は地域ごとにマジョリティである民系が異なっている。そうした状況を反映し、リンガ・フランカとして使用される方言も異なることとなる¹⁹⁾。こうした華人社会内部の下位集団ごとの使用言語と、マレーシア各地における下位集団の居住パターンは、マレーシア国内の華人社会の使用言語に地域的な偏差を与えることとなる。本稿で述べたように、サラワクではピンタンゴールやサリケイでは広東語が、サラトやクチンでは福建語が華人同士の共通語の一つとして使用されている。現在では華語教育の普及により、これらの地域の華人も華語を話すことが出来るが、日常的な会話では華語に加え、広東語や福建語といった方言も併用されている。このような多言語状況は、サラトからクチン、そしてマレーシア各地や台湾、シンガポールといった各地域に居住地を拡散させていった黄家のメンバーの使用言語にも影響を与えている。もともと広東省出身の仁培の子孫は民系としては広東系華人に属するが、現在の日常的な使用言語は福建語である。特に第三世代の榮和や榮錦が、広東語が共通語として使用されるクアラルンプールの華人社会でもっぱら華語を使用して生活したという経験は、民系としては広東系華人であるこの一家のサラワクにおけるローカルなレベルでの変容過程を如実に表している。

また、いわばローカルな使用言語の偏差に加え、華語という、いわば華人の公的な

19) 例えばシンガポールやペナン、ジョホールでは福建語が使用されることが多く、クアラルンプールやイボ一、サンダカンでは広東語が頻繁に使用される傾向がある。

共通言語も、黄家の言語に重要な役割を与えていることが見て取れる。シンガポールで生活する良華が、サラワク華人とシンガポール華人との相違点として、華語教育に言及するように、華語は黄家のメンバーのサラワク華人、またはマレーシア華人としてのアイデンティティを形成する上で重要な役割を果たしている。これはこの家族が、華人としての自分たち自身の文化について言及する際に、華語教育を受けることによりマレーシアでも正式な中国語や、中国や台湾の文化を学ぶことが可能になった、と述べることからもうかがえる。

ただし、サラワクにおける多言語状況が、サラワク華人と他地域の華人との差異を認識させる要因にもなっていることにも注意する必要がある。これはシンガポールで働く第二世代四男により、サラワク華人とシンガポール華人の違いとして両者の使用言語が説明される部分からも看取できる。華人が人口のマジョリティを占めるシンガポールとは異なり、サラワクは民族集団の数も多く、数多くの言語が使用されている。マレーシアにおける華人は、多言語状況の中で華語教育を行うことにより、自己の文化的アイデンティティの保持を試みている。だが本稿で取り上げた事例からは、このような多言語状況で生まれ育った経験は、サラワク華人が居住地の外で生活するような状況では、逆に自己の出身地のローカルな特徴として再認識される可能性があることを示している。地理的にも近く、住民の大部分が華人であるシンガポールでは、全体としての「華人」の共通性が認識されると同時に、「サラワク華人」としてのローカルな個別的な特徴も意識化されるのである。

2 ローカルな生活様式

前述のように、サラワクの華人社会でも「同化」や「本地化」、「本土化」といった言葉は、現地化と類似した意味で使用されている。だが黄家のメンバーによると、こうした言葉は、西マレーシアの華人社会で使用される「同化」や「本土化」の意味合いとは必ずしも一致してはいないとのことである。「同化」や「本土化」といった言葉は、ある文脈ではマレー語教育を受けた世代が、次第にマレー文化からの影響を受けることを表し、また別の文脈では、華人がマレーシア国民としての自己認識を持つことを言及する際に使用される傾向がある。だが黄家のメンバーからの説明では、サラワクの華人が「同化」や「本土化」という言葉を使用する際には、サラワク州内の他の民族集団との関係を念頭に置くことがあるとのことである。

こうした現地化の例として、黄家のメンバーからは、自分たちをはじめとするサラワクの華人は、主に食生活の点でマレーやイバンの文化からの影響を強く受けているのだという説明がなされる。マレーシア華人社会には、ニョニャ料理と呼ばれるマレー人やインド人の食文化からの影響を受けた料理が存在することはよく知られている。だが黄家のメンバーは、こうしたマレー料理やインド料理からの影響に加え、自分たちの食生活にはイバンと交流することにより、イバンの食文化の影響もうけていることをしばしば語るのである。サラトやクチンで生活する過程の中で、黄家のメンバーは商店やマーケットでマレー人やイバンが販売する食材や料理を購入し消費するようになった。自分たちでイバン風の料理を作ることがなくとも、竹の中にコメや野菜、肉等を入れて火にかけた料理 (*nasi buluh*) や、イバンが栽培する赤味がかったコ

メ (*nasi merah*), パク・パキス (*paku pakis*) やサユール・マニス (*sayur manis*) といった山菜を市場でしばしば購入し、食卓に供している。このような食生活は、サラワク以外のマレーシアの他地域の華人と自分たちの生活様式の相違点、特にイバンをはじめとするサラワクの民族集団と自分たちとの交流の中で獲得されることとなったものであり、黄家のメンバーたちはマレーシアの他の地域の華人と自分たちとの代表的な差異として説明するのである。

さらに現在の黄家のメンバーは、広東系華人ではありながら、福建語を日常的に使用するという使用言語以外にも、福建系華人から様々な影響を受けていると語ることが多い。例えば、黄家では春節の前日に家の裏側で「後面公」(*ah be gong*: 福建語) という神明を祭る。黄家メンバー、特に彩有の説明では、この神を祭るのは福建人の風習であり、クチンに居住する他の広東系華人にはない風習であるとのことである。実際に、彩有の親の世代が広東省やサリケイで暮していた時には、後面公を拝むことはなく、彼女がサラトで暮らすようになってから、他の福建人がこの神を拝む風習を見て、それに従うようになったとのことである。こうした点からも、広東省出身の華人の子孫である黄家は、サラトやクチンにおける華人の民系の中でもマジョリティである福建系華人との交流の中で、次第に福建系の生活様式を獲得するようになっていったことがわかる。

こうした福建系との交流は、彼ら彼女らの自称にも見られると思われる。華語を使用する際には、この家族も自分たちは「華人」(*hua ren*) であると述べる。だが福建語の会話の中では、チャイニーズとしての自らに言及する際には、「唐人」(*teng lang*) という表現を用いる。華僑という語は一時滞在を含意するため、すでにマレーシア国民として生活している自分たちを指すにはふさわしい語ではないということは、この家族もしばしば述べる。だが福建語による日常的な会話の中では、必ずしも「華人」という、ある意味でナショナル・アイデンティティを意図的に強調する用語は使用されていない。「唐人」という表現は広東系や福建系の華人が「中国系住民一般」を指すためにしばしば用いる言葉である²⁰⁾。だが「唐人」という言葉は、居住国への現地化やアイデンティティを強調する「華人」という言葉のようなマレーシアの他の民族集団からの中国系に対するイメージを念頭に置いた意味合いはない。前述のように当事者である華人自身による「華人」という語の使用は、マレー人を初めとするマレーシアの非華人系民族に対して、自己のマレーシアに対するナショナル・アイデンティティを強調する必要がある中で一般化したという背景がある。これに対し、必ずしもナショナルなレベルでのアイデンティティの所在を強調しなくてもよい、方言を使用したローカルな日常生活では、福建系華人の民俗語彙とも言える、「唐人」という語が用いられ続けている。このように、方言が使用されるよりローカルな生活の中では、必ずしも「華僑」と「華人」という語の区別にとらわれず、それよりも「中国系住民一般」というカテゴリー化の方がより実情に合っているのであろう。

20) 例えば、チャイナタウンにあたる地域をマレーシア華人は「唐人街」と呼んでいる。

3 現地化の多元性

黄家の三代代にわたるファミリー・ヒストリーからは、マレーシア生まれの世代が、次第にマレーシアという国家の国民として、あるいはマレーシア華人として、ナショナルなアイデンティティを獲得してゆくのと同時に、ミクロなレベルでは、それぞれの居住地の他の華人や他の民族集団との関係の中で、ローカルなレベルでのアイデンティティや生活様式を変容させていったことが分かる。マレーシアにおける華人のエスニシティは、このように、ナショナルなレベルでの現地化と共に、居住地ごとのよりローカルなレベルでの現地化との多元的な同時進行として捉える必要があると思われる。いわば、マレーシア華人のエスニシティは、華人としての統一性や共通性ととも、それぞれのローカルな特徴に基づく個性との間の重層的な関係の中で変化するのだといえよう。

これは、「華僑」から「華人」へ、という現地化の過程が、居住地ごとの脈絡に従い、多方向的に進む可能性があることを意味している。いわば、それぞれの居住地ごとに異なる現地化があるのである。華人としてのあり方は必ずしも単一なものではなく、個々の華人が置かれる状況に従い、さまざまな形態がありうると表現することができよう [cf. Chan & Tong 2001; Ang 2001]。そのため、「中国人移民」が「華人系マレーシア国民」として定住化・国民化する過程は、必ずしも均質的な人々を生み出すだけではない。「華僑」から「華人」へ、という変化の過程は、一つの方向性のみを持つのではなく、複数の方向性を持ちうるのである。

マレーシアの華人社会にはその内部に様々な下位集団が存在することはしばしば指摘されることである。だがこうした華人社会内部の多様性も、華人のサブ・エスニシティを対象とする従来の研究が注目するような、出身地中国における地縁関係にのみ還元するのではなく、マレーシア国内における地域的な偏差にも注目することにより多元的に把握する必要がある。サラワク州におけるこの華人のファミリー・ヒストリーからも、現地化の多元性を視野に入れる重要性は明らかである。

謝 辞

本稿が依拠する現地調査は文部科学省科学研究費補助金研究プロジェクト「グローバル化下の東南アジアの社会変容と地域変化」(代表:梅原弘光, 基盤研究 A), 「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類的研究」(代表:三尾裕子, 基盤研究 A) および「パプアニューギニアにおける森林開発を通して見たマレーシア華人のネットワーク」(代表:市川哲, 若手研究 B) からの資金援助により可能になった。現地で知り合ったサラワク華人の友人たちには調査に快く協力していただいた。関係者各位に深謝いたします。

参 考 文 献

Ang, Ien

- 2001 *On Not Speaking Chinese: Living between Asia and the West*. London: Routledge.

蔡增聰

- 2001 『辺站・硝煙・貿易——十九世紀砂拉越堡の研究』Sibu: 砂拉越留台同学会詩巫分会出版.

- 2004 『歴史的思索——砂拉越華人史論集』Sibu: 砂拉越留台同学会詩巫分会出版.

Chan Kwok Bun and Claire Chiang

- 1994 *Stepping Out: The Making of Chinese Entrepreneurs*. Singapore: Prentice Hall.

Chan Kwok Bun and Tong Chee Kiong

- 2001 Positionality and Alternation: Identity of the Chinese of Contemporary Thailand, In *Alternate Identities: The Chinese of Contemporary Thailand*, edited by Tong Chee Kiong and Chan Kwok Bun, pp. 1-8, Singapore: Times Academic Press.

Chew, Daniel

- 1990 *Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier 1841-1941*, Singapore: Oxford University Press.

- 2000 The Chinese in Sarawak: An Overview. In *The Chinese in Malaysia*, edited by Lee Kam Hing and Tan Chee-Beng, pp.370-381, Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Chin, John

- 1980 *The Sarawak Chinese*, Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Chin Ung-Ho

- 1997 *Chinese Politics in Sarawak: A Study of the Sarawak United People's Party*, Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Crissman, Lawrence W.

- 1967 The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities, *Man (N.S.)* 2(2): 185-204.

Fidler, R. C.

- 1976 Sarawak and the Study of Plural Societies: An Outline. *Sarawak Museum Journal*. 24(5): 173-184.

- 1978 Chinese-Iban Economic Symbiosis, *Southeast Asian Journal of Social Science* 6(1-2): 56-77.

原不二夫

- 2000 「マレーシア華人の見た『マレーシア民族』」『アジア経済』41(2): 52-64.

何国忠

- 2002 『馬來西亞華人——身份認同・文化与族群政治』Kuala Lumpur: 華社研究中心.

市川哲

- 2000 「同郷会館の国際化と現地化——シンガポール及びマレーシアの福建会館を事例として」『史苑』61(1): 9-31.
2007 「サブ・エスニシティ研究にみる華人社会の共通性と多様性の把握」『華僑華人研究』4: 69-80.

King, Victor T.

- 1993 *The People of Borneo*, Oxford and Cambridge: Blackwell Publishers.

Kiu Mee Kuok

- 1997 *The Diffusion of Foochow Settlement, In Sibuan Binatang Area Central Sarawak 1901-1970*, Sibuan: Sarawak Chinese Cultural Association.

李亦園

- 1965 「馬來西亞華人社会的社團組織与領袖形態」『民族学研究所集刊』20: 1-45.

劉崇漢

- 1998 「馬來西亞華人社團」『南洋學報』53: 185-201.

劉子政

- 1998 『黃乃裳與新福州』Sibuan: 砂拉越華族文化協會.
2000 『砂拉越華族史論集』Sibuan: 砂拉越華族文化協會.
2001 『砂拉越 130 年大事記』Sibuan: 砂拉越華族文化協會.

Lockard, Craig A.

- 2003 *Chinese Immigration and Society in Sarawak: 1868-1917*. Sibuan: Sarawak Chinese Cultural Association.

Moese, Wolfgang, Gottfried Reinknecht and Eva Schmitz-Seisser.

- 1979 *Chinese Regionalism in West-Malaysia and Singapore*. Hamburg: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.

小木裕文

- 1994 「東マレーシア・サラワク州の華人社会と華語教育」『立命館国際研究』7(1): 63-73.

Ooi Keat Gin

- 1997 *Of Free Trade and Native Interests: The Brookes and the Economic Development of Sarawak, 1841-1941*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

邱依虹

- 2004 『生命如河流——新馬, 泰十六位女性的生命故事——馬來西亞, 新加坡, 反殖, 獨立運動紀實 (1938-1989)』Petaling Jaya: 策略資訊研究中心.

Rousseau, Jérôme

- 1990 *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. Oxford: Clarendon Press.

砂拉越華族文化協會

1999 『斯里阿曼省華族史料集』Sibu: 砂拉越華族文化協會.

Strauch, Judith

1981 Multiple Ethnicities in Malaysia: The Shifting Relevance of Alternative Chinese Categories, *Modern Asian Studies* 15(2): 235-260.

Suryadinata, Leo

1997 Ethnic Chinese in Southeast Asia: Overseas Chinese, Chinese Overseas or Southeast Asians? In *Ethnic Chinese as Southeast Asians*, edited by Suryadinata, Leo, pp.1-24, Singapore: Times Academic Press.

Strive, Vinson H. Jr.

1989 The Iban in Historical Perspective, *The Sarawak Museum Journal* 61: 33-43.

戴国輝

1980 『華僑——「落葉歸根」から「落地生根」への苦闘と矛盾』東京: 研文出版.

田村慶子

2004 「サラワクの華語教育と華人社会」『北九州市立大学法政論集』31 (3-5): 153-182.

Tan Chee Beng

1998 People of Chinese Descent: Language, Nationality and Identity. In *The Chinese Diaspora: Selected Essays Volume I*, edited by Wang Ling-chi and Wang Gungwu, pp. 29-48. Singapore: Times Academic Press.

2000 Socio-Cultural Diversities and Identities. In *The Chinese in Malaysia*, edited by Lee Kam Hing and Tan Chee-Beng, pp. 37-70. Oxford: Oxford University Press.

2004 *Chinese Overseas: Comparative Cultural Issues*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

谷口房男

1987 「マレーシア華人の同郷会館と同郷意識について——イポ市を中心として」『東洋大学文学部紀要——史学科篇』41: 55-74.

T'ien Ju-K'ang

1997 (1953) *The Chinese of Sarawak: A Study of Social Structure*. Kuching: The Sarawak Press (First published in London: Dept. of Anthropology, London School of Economics and Political Science).

田英成

1991 『砂拉越華族社会結構與形態』Kuala Lumpur: 華社資料研究中心.

1999 『砂拉越華人社会的變遷』Sibu: 砂拉越華族文化協會.

王賡武 (Wang Gungwu) 著, 趙紅英訳

1999 「単一的華人散居者?」(英文題名: A Single Chinese Diaspora?)『華僑華人歷史研究』1999(3): 1-14.

Wang Ling-chi

- 1998 On Luodi-shenggen. In *The Chinese Diaspora: Selected Essays Volume I*, edited by Wang Ling-chi and Wang Gungwu, pp. x-xi, Singapore: Times Academic Press.

Winzeler, Robert L.

- 1997 Modern Bidayuh Ethnicity and the Politics of Culture in Sarawak. In *Indigenous People and the State: Politics, Land, and Ethnicity in Malayan Peninsula and Borneo*, Winzeler, Robert L. pp. 201-227, New Heaven: Yale University Southeast Asia Studies.

呉誥賜

- 2004 『初三流・十八水——成邦江文史論集』Sibu: 砂拉越華族文化協會.

山下清海

- 2002 『東南アジア華人社会と中国僑郷——華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』東京: 古今書院.

吉原和男

- 1982 「サラワク華人社会の民衆教団——適応とアイデンティティ」『神々の相克——文化接触と土着主義』中牧弘允（編），81-108 ページ，東京: 新泉社.